

## 情は人の為ならず

他人のためになると思われることを、その人の心情になっていろいろめんどろをみてあげることが、その人のためになるだけではなく、人間関係を良好にすることになり、結局は自分のためになるのだという教えです

最近の若い人の会話のなかで、この言葉を逆に解釈し、「いろいろ他人の世話をやいたり、気を使ってあげると、その人を甘やかしてしまうから、結局はためにならない」というように使っていました。

つまり、情けをかけると逆効果となってしまうと、その人のためにならない、したがって自分のためにもならない、というように受け取っているのです。しかし、このことわざには「情が仇<sup>あだ</sup>」というものがあります。

現実にはどちらも真理のような気がします。人の世話がすきで、わが子のように教え育てた人に、ひどい仕打ちをされたり、あざむかれたりすることも少なくありません。俗に「飼い犬に手を噛まれる」などの表現もあります。つまり、手塩にかけた人物が恩を仇で返したということが、世間では往々に見られるということです。若い人が、逆に取って解釈するのも無理がない、といえましょう。

人に情けをかけることにより、全然逆の効果がでることに関して、もう少し分析してみましよう。

- 1) 相手をよくみて情けをかける
- 2) 情けをかける方法をよく考える
- 3) 自分自身の生れつきの資質や立場を反省してみる

この3点から「情けについての矛盾」の真理が見えてきます。

まず第1に「人を見て法を説け」というように、同じことを言ってもその効果が人によって違うということです。つまり、相手側が、初めから利益を求めたり、裏切りを予定しているような場合は、下手に好意を示して努力すれば、逆手に取られてしまうのは当然です。

また、意志が弱く、依頼心の強い人に情けをかければ、「情けが仇」になることが多い訳です。

次に、相手に便宜<sup>べんぎ</sup>を与える方法や手段が誤っているときは、本人は人のためになると思っているのに、逆に恨まれる結果に終わるようです。あまり、押し付けがましい態度で恩をきせたり、他人にも分かるようなあからさまな方法は、情けをかけられた方の反発を買うことは必至<sup>ひつし</sup>です。

ほんとうに相手側が欲していることを、あっさりと、他人に知れないような形で与えるという配慮が必要といえましょう。

第3は、人生を送る基本則の一つである「己を知る」ということです。

お人よしと言われるような、いわゆる好人物として世に通っているような人の場合は、「おせっかい」とか「またあの人の趣味が始まった」ぐらいに受け取られ、その人の真意は伝わりません。地位の高い人や、利権にかかわる権力者が「情けをかける」ことは周囲にあらゆる配慮を要します。

“宝在心”（宝＝幸せは外にあるのではなく心の中にある：たからはこころにあり）

上杉謙信公が残した家訓 上杉家家訓十六ヶ条

1. 心に物なき時は心広く体泰なり  
(心に見失わせるような物がない時は、心が広々として、体がやすらかになるものだ)
1. 心に我儘なき時は愛敬失わず  
(心に他を軽んずることがない時は、慈しみや敬うことを忘れないものだ)
1. 心に欲なき時は義理を行う  
(心に貪り欲しがることがない時は、人を思いやるものだ)
1. 心に私なき時は疑うことなし  
(心に密かなことがない時は、物事に疑うこともない)
1. 心に驕りなき時は人を教う  
(心に思いあがった気持ちがなければ、人を尊ぶ)
1. 心に誤りなき時は人を畏れず  
(心に邪まなことがなければ、人を恐れることはない)
1. 心に邪見なき時は人を育つる  
(心に偏った見方がない時は、人を立派に育てる)
1. 心に貪りなき時は人に諂うことなし  
(心に欲深くない時は、人をへつらうこともない)
1. 心に怒りなき時は言葉柔らかかなり  
(心に怒りがなければ、言葉はもの柔らかになるものだ)
1. 心に堪忍ある時は事を調う  
(心に耐え忍び、努力することがある時は、物事は上手く行くものだ)
1. 心に曇りなき時は心静かなり  
(心が晴れていれば、心は穏やかである)
1. 心に勇みある時は悔やむことなし  
(心に勇気がある時は、後悔することもないものだ)
1. 心賤しからざる時は願い好まず  
(心に賤しい気持ちがなければ、無理な願いは好まないものだ)
1. 心に孝行ある時は忠節厚し  
(心に尽くそうとする気持ちがあれば、節義も深い)
1. 心に自慢なき時は人の善を知り  
(心に自惚れることがない時は、人のすぐれたことを知る事が出来るものだ)
1. 心に迷いなき時は人を咎めず  
(心に信念があれば、人を責めないものだ)

## 愚公移山

どんな難事でも志をもって専念して努力すれば可能となることのたとえ。

中国・戦国時代の「列子」湯問編にある故事に由来する。

昔、冀州（きしゅう）より南、河陽の北に太行山（たいこうざん）、王屋山（おうおくざん）という大きな山が二つあった。

山の北側に90歳になる愚公（ぐこう）という老人が住んでいた。彼の家はちょうどこの2つの山に面していて、どこへ出かけるにも不便で仕方なかった。ある日、愚公は家族を集めて相談した。「われわれ全員で頑張って、山を掘り崩してしまおう。そして、豫州に行く道を開こう。お前たちはどう思う？」皆は賛成したが、彼の妻だけは賛成しなかった。彼女は言った。「太行、王屋のような大きな山から掘り出した石や泥はどこへ持っていくのですか？」皆は言った。「簡単なことさ、泥や石は渤海にすてればいい！」と。

次の日からすぐ、愚公は家中の年寄りから子供までを連れて、山を掘り始めた。彼の隣の家には未亡人が住んでいた。彼女には幼い子供がいたが、一緒に手伝った。みんな頑張っていて、一年中休まず山を掘進んだ。黄河沿岸に智叟（ちそう）いう、とても頭がよい老人が住んでいた。彼は愚公たちが一年中つらい思いをして山を掘り土を運び続けているのを見かねて愚公に忠告した。「あなたはほんとうに愚かな人だ。もう古い先短いだらうに、そんなことして何になる。死ぬまでにこの山のはしさえ削れないだらう。こんな年になってあと何年生きられるというのだ？」愚公は深くため息をついて言った。「あなたという人は、自分では賢いと思っているかもしれないが、実は頭が硬くて世間知らずだ。未亡人や小さな子供にさえも及ばない。おっしゃる通り私は年老いている。何年も生きられないだらう。でも、私が死んでも息子がいる。息子には孫が生まれる。孫に息子ができて、子々孫々、何世代もずっと続いていって尽きることがないのだ。一方この2つの山はもうこれ以上高くなることはない。我々がこの山を平らにしてしまうことができないことがあるか？」この話を聞いて、自分が賢いと思っていた智叟は、それ以上言う言葉がなかった。

山神がこのことを知り、年老いた愚公が山を掘るのをやめないのではないかと憂い、天帝に報告した。年老いた愚公の心意気に天帝は感動した。天帝はすぐに2人の大力神を下界に遣わし、2つの山を背負って運ばせた。1つは北方の東へ、1つは雍州の南へ。この後、冀州と漢水の南側にはさえぎる高い山がなくなった。

☆頑強な気力、困難を恐れず根気よく努力すれば、いつかは成し遂げられる。志のあるものは、ついには成せることのたとえ。また利口者といわれる人はえてして知叟のように、人のやっていることにけちを付けるだけで、自分では何一つやらない。利口とか愚かとか行っても、表面だけを見ただけではわからないということを教えています

## 五十歩百歩

「五十歩百歩」といえば、「似たりよったりである」「少しの違いだけで大差のないこと」という意味に使われることは、誰でも知っています。

ところで、五十歩と百歩とでは、歩数にして五十歩、倍数で二倍の違いがあります。これは大きな差だと言えないでしょうか。

では何故、「似たりよったりである」「少しの違いだけで大差のないこと」を「五十歩百歩」というのでしょうか。

中国の戦国時代（BC403－BC221）、梁<sup>りょう</sup>の恵王<sup>けいおう</sup>は、自分は善政<sup>ぜんせい</sup>を施<sup>ほどこ</sup>しているのに、自分の領地の人口が増えなくて、たいした善政もしていない隣国の人口が減らないのを嘆いて、孟子にその理由を問いました。それに対して孟子は答えます。

「王は戦いがお好きなので、戦いで例えましょう。戦いの最中に、戦場を放棄して五十歩逃げた者が、百歩逃げた者を笑ったとしたらどうでしょう」

王は答えています。

「それはだめだ。ただ百歩逃げたのではないだけで、五十歩でも、逃げたことには変わりはない」

恵王にそう言わせておいて孟子は、「恵王がなさっている善政は、隣国がやっていることと、程度の差はあっても、本質的な違いはないのです」と説きます。

この話から、「五十歩百歩」といえば、「程度の差はあっても、本質的な違いはないこと」をいうようになり、転じて、「似たりよったりである」「少しの違いだけで大差のないこと」という意味に使われるようになりました。

類似のことばに、「目糞鼻糞を笑う」「青柿熟柿を吊う<sup>せいしじゅくし とむら</sup>」があります。

### 梁<sup>りょう</sup>恵王<sup>けいおう</sup>章句上<sup>しょうきゅうじょう</sup>の3

孟子（もうし）対（こた）へて曰（い）はく、「王（おお）戦（たたか）ひを好（この）む。請（こ）ふ、戦（たたか）ひを以（もつ）て喩（たと）へん。填然（てんぜん）として之（これ）を鼓（こ）し、兵刃（へいじん）既（すで）に接（せつ）す。甲（こう）を棄（す）て兵（へい）を曳（ひ）きて走（はし）る。或（ある）いは百歩（ひゃっぽ）にして後（のち）止（とど）まり、或（ある）いは五十歩（ごじっぽ）にして後（のち）止（とど）まる。五十歩（ごじっぽ）を以（もつ）て百歩（ひゃっぽ）を笑（わら）はば、則（すなは）ち何如（いかん）」と。恵王（けいおお）曰（い）はく、「不可（ふか）なり。直（ただ）百歩（ひゃっぽ）ならざるのみ。是（こ）れも亦（また）走（はし）るなり」と。

### 口語訳

孟子がお答えして言いました。「王は戦いがお好きですから、戦いで例えさせてくださ

い。進軍の太鼓がなり、武器が接するほどの戦いになってから、鎧よろいを棄すてて、武器を引きずって逃げ出すものがでて、或る者は百歩逃げてから止り、或る者は五十歩逃げてから止りました。五十歩逃げた者が、百歩逃げた者を笑ったとしたらどうでしょう」

恵王は言いました「だめだ。ただ百歩でなかっただけだ。逃げたことには変わらない」と。

孟子が言いました。「王よ、それがおわかりでしたら、隣国より民が増えて欲しいとお望みにはなれますまい。もし、民を使うのに農繁期をさければ、穀物は食べ切れないほどとれるものです。目の細かい網を入れて幼魚ようぎょをとるようなことをさせなければ、魚は食べ切れないほど繁殖するものです。山に入るのに季節を限れば、材木は使いきれないほどとれるものです。このようにすれば、民は生きる者を養やしなうことも、死者を弔とむらうことも遺憾なくできます。これが王道の手始めであります。

五畝ごうけの家のまわりに桑の木を植えて養蚕ようさんをさせれば、五十過ぎの者は絹の着物が着られます。鶏や豚、犬などを育てて仔こを孕はらんでいるときに殺すようなことをさせなければ、七十以上の老人は肉食ができます。百畝の田を与え、農繁期を避けて労役などをさせれば、数人の家族なら飢えることはありますまい。学校での教育に力を入れ、目上の者を敬うやまうことを徹底させれば、白髪頭の者が道で重い荷物を背負っているというようなこともなくなります。七十過ぎの者が絹を着て肉を食べ、民が飢えることもなく凍えることもない。このようにして、王とならなかつたものは今までに一人もおりません。

ところが、王は犬や豚に人の食べるものを食わせても、食糧を蔵おきに収め貯えることをなさない。道端に飢え死にする者がいても、蔵を開こうともせず、民が飢え死にすれば、わしのせいではない、凶作のせいだとおっしゃるのは、人を刺し殺しておいて、私が殺したのではない刃物が悪いのだと言うのと違いはありますまい。王が民の苦しみを凶作のせいにして責任逃れなどなさらなければ、天下の民は自おのずと集まってまいるでしょう」

## 語釈

対へて：目上の人に答えるときにもちいられる

填然（てんぜん）として：太鼓などがドンドンと鳴る形容

兵刃（へいじん）：兵も刃も武器のこと。

甲：甲冑・鎧

兵（へい）を曳（ひ）きて：武器を引きずって

走（はし）る＝逃げる

## しゅうこちじん 修己治人

中国古典の『大学』に「修己治人」という言葉があります。「修己治人」とは、人の上に立ち、人を治めるには、何よりもまず自分を修めることから始めなければならないという教えです。この「修己治人」の思想こそが、現代人に1番求められているものです。

### 金次郎が学んだ書物

二宮金次郎が薪を背負いながら素読しているのは、四書の中の『大学』という書物です。『孟子』『論語』『中庸』に並ぶこの『大学』は、「修己治人」の学問と言われ、ひろく国を治め、民を治める人が学んだ本です。

金次郎も人の上に立つ人間として、多くの民百姓を治めるためにまず自分一身を修養しました。人を治めるにはまず自分自身を修めていなければならないと考えたからでしょう。特に桜町領の仕法が危機に瀕したとき、成田山新勝寺で21日間の断食修行を行います。金次郎はどんな時にも決して人の責任にはしませんでした。いろいろな困難に出会うたびに自分のいたるなさに気づき、黙々と自己を磨く努力をしたのです。たとえ悪口雑言をたたかれても、誰が悪いのでもない、人の上に立つリーダーとして自分の人格に問題があるから周囲の人が動かないのだと解釈して、自分を徹底して修めたのです。この厳しい生き方の根底には、幼い頃貧しい中で自習自得した「修己治人」の考えがあるのです。

修己とは、「自己修養」の大切さや学問による人間的完成の必要性を説いたものです。朱子のいう八条目のなかでは、格物・致知・誠意・正心・修身がこれにあたります。「その身を修めんと欲する者は先ずその心を正す。その心を正さんと欲する者は先ずその意を誠にする。その意を誠にせんと欲する者は先ずその知を致す。知を致すは物に格るに在り」と言っています。つまり、人の上に立つ人間の基本を説いたのです。

治人とは、人を治めるという意味です。齊家・治国・平天下がこれにあたりますが、「明德を天下に明らかにせんと欲する者は先ずその国を治む。その国を治めんと欲する者は先ずその家を斉う。その家を斉えんと欲する者は先ずその身を修む」と、格調高く表現しています。

つまり修己治人とは、人の上に立ち、人を立派に治めるためには、何よりもまず自分を修練することから始めなければならないと言っているのです。口先で人を治めたり、権力や地位の力で人を治めたり、金の力で人を治めることを戒め、自分を修めてこそ、はじめて人を治めることができるのだと説いているのです。とてもシンプルな考え方ですが、この修己治人の思想こそは現代の私達1人ひとりに1番求められているものです。

ばんぶつせいどう  
万物斉同

万物は道の観点からみれば等価値なのである一つであるという荘子の思想である。

荘子は物事の真実たる「道」を知ることが、充実した生を生きることだと考えた。人はとにかく是非善悪といった分別知をはたらかせるが、その判断の正当性は結局は不明であり、また、一方が消滅すればもう一方も存立しない。つまり是非善悪は存立の根拠がひとしくて相対的であり、それを一体とする絶対なるものが道である。

このようにみれば、貴賤(きせん)などの現実の社会にある礼法秩序も、すべて人の分別知の所産による相対的なものとわかる。それどころか、生死ですら相対的である。人は生をよるこび死をにくむが、生も死も道の姿の一面にすぎないということ。

## 四つの忠臣（国家の柱石） 荀子

忠臣：たとえ命令に逆らっても、君主の利益をはかる臣下

### 1 諫臣<sup>かんしん</sup>

進言し君主が聴きいれればよし、聴きいれなければ国を去る決心で進言する臣下  
諫（カン、いさむ、いさめる）諫言（かんげん）

### 2 争臣<sup>そうしん</sup>

君主が聴きいれればよし、聴きいれなければ命をすてる覚悟で進言する臣下

### 3 補臣<sup>ほしん</sup>

役人たちの先頭に立ち、みんなの意思を結集して、集団の力で君主の意志を変えさせる臣下がある。君主はおもしろくないが、聴きいれぬわけにはゆかないが、そのおかげで滅亡の危険が去り国の悩みが消え失せ、結局は国も栄え君主の権威も高まることになる。

### 4 弼臣<sup>ひつしん</sup>

君主の命令にそむくばかりでなく、君主の主権を奪ってまで君主の政策に反対し、そうすることによって国の危難を救い君主の名誉を守る臣下がある。その働きは国家最大の利益をもたらすと言ってよい。これが弼臣である  
弼（ヒツ、たすく）たすける、補佐する

## 国家の柱石

柱といはずえ。転じて、柱ともいはずえとも頼む人。特に国家・団体などを支える中心人物。

## 名言、格言等

### 1 惻隱の心は仁の端なり（孟子） 「惻隱の情」

他人のことをいたましく思って同情する心は、やがては人の最高の徳である仁に通ずるものです。人間の心のなかには、もともと人に同情するような気持ちが自然に備わっているものですから、自然に従うことによって徳に近づくことができるのです。

### 2 幸運は汗への配当である。汗をかけばかくほど幸運を手にすることができる。

これはマクドナルドの創業者レイ・クロックが見つけたルールです。

### 3 天網恢恢疎ニシテ漏ラサズ（「無為自然」を説いた老子）

「天網」とは、天が世の理非を正すために張った網のこと。「恢恢」とは、広く、ゆったりとしているさま。「天網恢恢疎而不漏」（老子）とは、天網の目は粗いが決して悪人を逃しはしない、という意味である。

### 4 白珪なお磨くべし

「白珪」とは、よく磨かれた価値のある美しい玉のことです。

『白珪』のようによく磨かれた者でも、さらに磨くことでより価値を増し、美しく光り輝く」という意味です。

いつまでも向上心を持ちつづけ、鍛錬に励むのが大切です。

白珪でもなお磨きつづけよう、完成の域にも止まってはならない。さらに進歩に励もうとするのが、上の無い上一無上をめざす努力です。

### 5 照顧脚下

禅寺の玄関にはよく「照顧脚下」と書かれた札が下がっています。「履物を揃えて脱いで下さい。足元に注意して、進退往来に十分気を付けて下さい。」という意味です。しかし、そこには「自分自身の足下、置かれた状況、自分自身をしっかりと見つめなさい。」という別の意味があるのです。他人の足下、つまり他人の長所や短所、その方の立場などは見えても、自分の足下、つまり自分自身のこととなると案外見ているようでいて見ていないものです。

### 6 自ら反みて縮くんば、千万人と雖も、吾往かん。（孟子）

自分の心を振り返って見たときに自分が正しければ、たとえ相手が千万人であっても私は敢然と進んでこれに当らう。

### 7 愚公移山

どんな難事でも志をもって専念して努力すれば可能となることのたとえ。中国・戦国時代の「列子」湯問編にある故事に由来する。

## 8 胡蝶の夢

莊子が、蝶となり百年を花上に遊んだと夢に見て目覚めたが、自分が夢で蝶となったのか、蝶が夢見て今自分になっているのかと疑ったという「莊子（せいぶつろん）」の故事による。

- (1) 夢と現実との境が判然としないうたとえ。
- (2) この世の生のはかないたとえ。

## 9 五十歩百歩

「程度の差はあっても、本質的な違いはないこと」をいうようになり、転じて、「似たりよったりである」「少しの違いだけで大差のないこと」という意味に使われるようになりました。類似のことばに、「目糞鼻糞を笑う」「青柿熟柿を吊とむらう」があります。

## 10 淮陰の股くぐり（韓信の股くぐり）

大志のある者は目前の小事しょうじには忍耐して争わないというたとえ。

## 11 国士無双

国士というのは国の中で一番優れている人物のことを言い、無双というのは並ぶ者がいないという意味です。ですから、天下に並ぶ者がいない程の優れた人物を「国士無双」と言います。そして、かつて国士無双といわれた人物が韓信（かんしん）という人です。

## 12 上善は水のごとし

最高の人生のありかたは、水のように生きるということです。水は自分の存在を主張しないで、低い方へ自然に流れていきます。水のようにしてこそ心穏かにすごすことができ、また円満な人間関係を創り上げることができます。

## 13 季下に冠かんまりを正さず

君子たるものは、人から疑いを招くような事を未然に防ぎ、嫌疑をかけられるような振る舞いはしないものだ。（取ろうとしていると勘違いされぬように）瓜（うり）畑の中で靴を穿（は）くような仕草をしたり、李（すもも）の木の下で冠をかぶりなおしたりはしないものだ。

## 14 和して同ぜず

人と協調していくが、決してむやみに同調しないということで、人とのなごやかな人間関係には心掛けるが、その場かぎりに、無責任に賛成したりしないという意味です。

## 15 和光同塵

頭の切れることや知性の鋭いことを鼻にかけるようなことはやめ、争いごとのもととなるような問題点をときほぐして、平々凡々な人として他人とうちとけることをいいます。

## 16 知行合一

陽明学の実践重視の立場を示す説。朱子学の先知後行説が認識を実践よりも優先重視するのに対して、真の認識は実践を通じて獲得されるという見地から認識と実践を一致させる必要を説く。

知識をつけることは、行動することの始まり。行動することによって、身につけた知識も完成される。行なわなければ、知っているとは言えず、知っていても行なわないのは、まだ知らないのと同様。知って、行なってこそ、本当の知恵なのだ

## 17 事上磨錬（事上練磨ともいう）

朱子学においては読書や静坐を重視したが、陽明はそうした静的な環境で修養を積んでも一旦事があった場合役には立たない、日常の生活・仕事の中で良知を磨く努力をしなければならぬ。

## 18 格物致知

朱子学では格物において自己の知識をその極にまで推し究めること。また、陽明学では格物において自己の良知を錬磨発揚すること。

## 19 わけ登る ふもとの道は多けれど おなじたかねの月をこそ見れ（一休）

人生にはいろいろな生き方がある。しかも、どのような生き方をしてもよい。つまり、人生という山の頂上に行きつくには、どんな道を歩いて登ってもよいということだ。しかし、ただ何となく歩いていたのでは、いつまでたっても頂上に行きつくことなく終わってしまう。頂上を究めるには、山の嶺の月を見て登ることだ。この月がすなわち“理想”なのである。理想を持ち、理想を求めて歩き続けることによって、一步一步理想に近づくことができる。山登りの途中で道に迷うのは、理想を見失うからである。それはちょうど、月明りを頼りに夜道を歩いているとき、月が雲の陰に隠れるような不安さである。理想を持ち続け、それに向って努力する人には迷いがなく、求め続けてさえいれば、必ず頂上に到達することができる。これでこそ、確たる人生が歩めるのである。

## 20 衆生本来迷道の心（一休）

「無始無終我が一心、不成仏の性・本来の心。本来成仏、仏の妄話、衆生本来迷道の心。」

この詩偈は“始めも終わりもない私の本心は、仏になることのできない性分である。人間には本来仏になる種子が備わっているというのは、衆生を導くための仏の方便である。なぜなら、衆生は本来迷いの心しかないからだ”という意味に受け取れよう。

## 21 情は人の為ならず

他人のためになると思われることを、その人の心情になっていろいろめんどろをみてあげることが、その人のためになるだけではなく、人間関係を良好にすることになり、結局は自分のためになるのだという教えです

## 22 日々是好日（にちにちこれこうじつともいう）

私たちの人生は雨の日もあり、風の日もあり、晴れの日もあります。しかし、雨の日は雨の日を楽しみ、風の日には風の日を楽しみ、晴れの日には晴れの日を楽しむ。すなわち楽しむべきところはそれを楽しみ、楽しみ無きところもまた無きところを楽しむ、これを日々是れ好日というわけです。どんな苦しい境界に置かれても、これ好日、結構なことだと、カラ元気でなく心から味わえるようにならなければなりません。

## 23 煩惱即菩提（ぼんのうそくぼだい）

真の悟りとは煩惱を知ることによって得られるものだという事。

煩惱にとらわれている姿も、その本体は真実不変の真如（しんによすなわち）即ち菩提（悟り）であり、煩惱と菩提は別のものではないということ。

## 24 生死即涅槃（せいしそくねはん）

大乘仏教の空観（くうがん）に由来するもので、悟った仏智（ぶつち）から見たならば、迷える衆生（しゅじょう）（現実）の生死の世界そのものが不生不滅（しやうじやう）の清浄（ねはん）な涅槃の境地であるという意。煩惱即菩提と対句で用いられる。

## 25 満堂和氣生嘉祥（まんどうわきしやうかしよう）

みんなで和氣あいあいと仲良く力を合わせて仕事に励めば、企業はおのずと繁栄する。

## 26 明朗進取（めいろうしんしゆ）

明るく朗らかで何事にも目標を定め、自ら進んで取り組む姿勢。

## 27 六根清浄（ろっこんしやうじやう）

六根にそなわる煩惱（げが）の汚れが払い落とされ、物事を正しく判断できる智慧（ち）を得ることをいいます。たとえば目が不自由であったとしても、妙法受持（みやうほうじゆじ）の功德によって、肉眼（にくげん）以上の慧眼（えげん）・法眼・仏眼を得ることができるのであり、このような功德は他の五根にもつうじている。

六根の「根」とは、草木の根に譬（たと）えられ、私たちの生命が周囲のものを取り入れたり、認識する能力のことで、眼根（げんこん）・耳根（にこん）・鼻根（びこん）・舌根（ぜつこん）・身根（しんこん）・意根（いこん）の六つの器官をいいます。

28 心が変われば態度が変わる。態度が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば人生（運命）が変わる」と。これを前後を逆にして云うならば、「人生【運命】を変えたければ、人格を変えなさい。人格を変えたければ習慣を変えなさい。習慣を変えたければ、態度を変えなさい。態度を変えたければ心【思いの他】を変えなさい！」（アミエルの日記から）

アミエルの日記は、スイスの哲学者、アンリ・フレドリック・アミエル（Henri Frédéric Amiel、1821年9月27日-1881年5月11日）が、死の直前までの30年にわたって書き続け、死後に出版された。

29 巧言令色、鮮なし仁 (論語 01-03)

ことば上手の顔よしでは、ほとんど無いものだよ、人の徳は。

30 吾れ日に三たび吾が身を省みる (論語 01-04)

私は毎日何度も我が身について反省する。人の為を考えてあげて真心からできなかったのではないか。友達と交際して誠実でなかったのではないか。よくおさらいもしないことを [受け売りで] 人に教えたのではないかと。

31 温故知新 (論語 02-11)

故きを温めて新しきを知る。古いことに習熟して新しいこともわきまえる。

32 学んで思わざれば則ち罔し。思うて学ばざれば則ち殆うし。 (論語 02-15)

学んでも考えなければ [ものごとは] はっきりしない。考えても学ばなければ [独断に陥って] 危険である。

33 利に放りて行えば、怨み多し。 (論語 04-12)

利益ばかりにもたれて行動をしていると、怨まれることが多い。

34 位なきことを患えず、立つ所以を患う。 (論語 04-14)

地位のないことを気につけないで、地位を得るための [正しい] 方法を気にかけることだ。

35 これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを樂しむ者に如かず。 (論語 06-20)

知っているというのは好むのには及ばない。好むというのは楽しむのには及ばない。

36 疏食を飯い水を飲み、肱を曲げてこれを枕とす。樂しみ亦た其の中に在り。不義にして富み且つ貴きは、我れに於て浮雲の如とし。 (論語 07-15)

粗末な飯を食べて水を飲み、腕を曲げてそれを枕にする。楽しみはやはりそこにも自然にあるものだ。道にならぬことで金持ちになり身分が高くなるのは、私にとっては浮雲のよう [に、はかなく無縁なもの] だ。

37 我れ三人行なえば必ず我が師を得。 (論語 07-21)

私は三人で行動したら、きっとそこに自分の師を見つける。善い人を選んでそれを見習い、善くない人にはその善くないことを [我が身について] 直すからだ。

38 其の位に在らざれば、其の政を謀らず。 (論語 08-14)

その地位にいるのでなければ、その政務に口出ししないこと。

39 子、四を絶つ。意なく、必なく、固なく、我なし。 (論語 09-04)

先生は四つのことを絶たれた。勝手な心を持たず、無理押しをせず、執着をせず、我を張らない。

40 三軍も帥を奪うべきなり。匹夫も志しを奪うべからざるなり。 (論語 09-26)

大軍でも、その総大将を奪い取ることができるが、一人の男でも、その志しを奪い取ることには出来ない。

41 人を傷えりや。馬を問わず。 (論語 10-13)

厩が焼けた。先生は朝廷からさがってくると、「人に怪我は無かったか。」と言われて、馬のことは問われなかった。

42 驥は其の力を称せず。其の徳を称す。 (論語 14-35)

名馬はその力を褒められるのではなくて、その徳（性質のよさ）を褒められるのだ。

43 与に言うべくしてこれと言わざれば、人を失う。与に言うべからずしてこれと言えば、言を失う。知者は人を失わず、亦た言を失わず。 (論語 15-08)

話しあうべきなのに話しあわないと、相手の人を取り逃がす。話しあうべきでないのに話しあうと、言葉を無駄にする。智の人は人を取り逃がすこともなければ、また言葉を無駄にすることも無い。

44 躬自ら厚くして、薄く人を責むれば、則ち怨みに遠ざかる。 (論語 15-15)

我と我が身に深く責めて、人を責めるのを緩くしていけば、怨みごと [怨んだり、怨まれたり] から離れるものだ。

45 過ちて改めざる、是れを過ちと謂う。 (論語 15-30)

過ちを改めない、これを [本当の] 過ちというのだ。

46 君子は貞にして諒ならず。 (論語 15-37)

君子は正しいけれども、馬鹿正直ではない。

47 道同じからざれば、相い為めに謀らず。 (論語 15-40)

道が同じでなければ、互いに相談しあわない。

48 辞は達するのみ。 (論語 15-41)

言葉は [意味が] 通じさえすればいいのだ。

49 小人の過つや、必ず文る。 (論語 19-08)

小人が過ちをすると、きっと作り飾 [って、誤魔化そうとす] る。

50 「兵は拙速<sup>せつそく</sup>を聞くも、未だ<sup>いま</sup>巧<sup>たくみ</sup>の久しき<sup>ひさ</sup>を賭<sup>み</sup>ざるなり。夫れ<sup>そ</sup>兵久しくて国に利するは未だ之有らざるなり」 孫子

多少作戦にまずい点が残っても速やかに決着をつければ成功するが、戦いを長引かせて良い結果は得られない。そもそも戦いが長引いて国に利益をもたらした例は無い。

戦争には拙速（まずくても速い）というのはあっても、巧久（上手いけど長びく）という例を知らない。そもそも戦争が長びいて国家に利益があるなど、あったためしがない。

51 宝在心

宝＝幸せは外にあるのではなく心の中にある：たからはこころにあり。

上杉謙信公が残した家訓 上杉家家訓十六ヶ条

52 災難<sup>あ</sup>に逢<sup>あ</sup>ふ時節には災難に逢<sup>あ</sup>ふがよく候。死ぬる時節には死ぬ<sup>こ</sup>れがよく候。是はこれ災難をのがる<sup>み</sup>る妙法<sup>みょうほう</sup>にて候。 良寛

地藏堂（新潟県）に一人のたちの悪い船頭さんがいて、いつかあのカンジン坊主を困らせてやろうと思っていました。丁度通りかかった良寛を見つけて、船に乗せました。良寛さんが乗った途端、船を揺（ゆ）すり川の中に振り落としました。そしてしばらく良寛の苦しむのを見て楽しんでから船へ引き上げてやりました。良寛さんは少しも驚かずに、怒りもせず、困りもしないで、一命を救ってくれたこの船頭にお礼を言いました。

53 人はパンだけで生きるのではない 申命記8章3節

「人の生くするはパンのみによるにあらず、神の口より出づるすべての言葉による。」  
（文語訳）人間は肉体だけの存在ではなく、霊と肉体の両方を備えているので、パンだけでは不十分であり、神のことばが必要であるというように理解されているようです。つまり人間は肉体の糧だけでなく、霊の糧が必要であると。

54 奉仕を主とする事業は栄え、利得を主とする事業は衰える

自動車王ヘンリー・フォード

企業の生き残り競争が激しくなる中、もうけた者が勝ちという風潮がはびこっている。だが、理念と理想を置き去りにするとしっぺ返しをくらう。

55 詩を作るより田を作れ （しをつくるよりたをつくれ）

詩を作る暇があったら田を耕せ。実生活に何の役にも立たない風流なことより、実益のある仕事を優先せよということ。

## 入木道（じゅぼくどう）

「入木道（じゅぼくどう）」とは「筆道（ひつどう）」のことであり、書道の異称<sup>いししょう</sup>です。既に中国の書論には「入木」のことが記されています。

「余、志学の年より心を翰墨<sup>かんぼく</sup>にとどめ、鍾・張の余烈<sup>しゅう・ちやうのよれつ</sup>を味わい羲・献の前規<sup>しぎ・けんのぜんけい</sup>をくみ、（中略）入木の術に背くも（筆道を十分に極めておりませんが）臨池<sup>りんけい</sup>の志を隔てることなし」（孫過庭『書譜』）近頃は書家の間でもあまり耳にすることはないが、出典は唐・張懷瓘の『書断』にある王羲之のエピソード。羲之が書いた祝版<sup>しゆばん</sup>を工人<sup>こうじん</sup>が削ったところ、木に墨が三寸も入っていたという話です。「羲之の祝版に書す。工人、これを削る。筆、木に入る三分」

この話、木の中に何センチ何ミリも墨が染み込むという、まず起こりえない現象が“書聖”だからこそできたという驚愕を語ったものです。

わが国の書道を入木道と呼び慣わしたのは、それだけ王羲之の感化が大きかった証拠で、『万葉集』に「羲之」と書いて「てし（手師）」と読ませたのがその好例です。

「入木道とは書道の異称、藤原行成以来の伝統的な世尊寺家以来の秘説を集大成した『夜鶴庭訓抄』をはじめ『才葉抄』『入木抄』を収録」とあります。いずれも平安末期から中世に著された書の“奥伝”を記した秘本であり、江戸期までの日本書道史を代表する三大書論です。

三書とも通底する考え方はおおむね一致していますが、異なる意見も散見されます。とりわけ目を引いたのは、『才葉抄』の楷書先習論と『入木抄』の行書先習論の違いです。

## 守破離（しゅはり）

空手道でも、剣道でも、書道でも、茶でも、花でも、その修行の過程を「守」・「破」・「離」の三段階に分けている。

「守」というのは、一から十まで型通りにやることであり、それが一通り終る頃になると、型にはまり融通のきかないものになるので、「破」の段階に入れというのです。「破」とは文字通り「破る」ことで、型にはまったことを破って行く努力をすることであり、一寸考えると何でもないことのようにですが、それは「守」の段階をふまない人の考えることで、本当に「守」の型にはまった人がそれを破るということは実に容易でないことです。

空手の中で、型が大変に上手であるが、組手が出来ない人たちを見かけます。大会でも型は型、組手は組手というふうに分けているようです。本当は型が上手で組手が強いという様にならないかならないと思います。一つ一つの技が上手になれば、組手に生かせなければ意味がなく、「守」から「破」ることがむずかしく、出来ないのではないかと思います。

ところで、「破」の段階を卒業すると、はじめて「離」の段階に入りますが「守」からも「破」からも離れて型通りやらなければならぬ時には型通りにやり、型を破る必要のある時には、これを破りそれこそ「心の欲する所に従って矩をこえず」の境に達するのですが、それが仲々容易のことではなく、それこそ、**一所懸命 — 一所懸命 — 一所懸命**のことなのです。というのは、一応は「守」—「破」—「離」—の段階を経て、自由の境地に遊び得たと思っているうちに、あるいは内的にあるいは外的にその時の自己の力量以上の問題にぶつかると、これではならないという自己疑惑、もしくは自己否定に陥り、更により高き段階の新たなるものを求めて、これに対して「守」の修行に進み、「破」に進み、「離」に進み、守破離 — 守破離、と進むのが真面目な人生のすがただと思います。

## 完璧（出典：史記「藺相如伝」）

### 【意味】

- 1：きずのない玉をいう。転じて欠点がなくてすぐれてよいこと。
- 2：璧（たま）を完（まっ）とうする。

趙の国に和氏の璧という名玉があったのを、秦の昭王が欲しがって、十五城と交換しようとして強制した。玉を取り上げたまま、城をよこす意志のないことが明らかであったが、その時、秦に使いした藺相如の働きで、璧をまっとうして帰ることができたという故事によって、人から借りた物を返すことを**完璧**または**完璧趙**という。

### <史記・藺相如伝>

一つも欠点がなく、完全なこと。完全無欠。璧は、ドーナツ型で平たく、中央に穴のある宝玉。

### 和氏の璧：天下の名宝の名。貴重な宝。出典：韓非子

春秋時代、楚人の和氏（かし）は楚の山中で玉の原石を見つけて、これを厲王（れいおう）に献上した。厲王がこれを玉の細工師に調べさせた。玉の細工師は言った。「ただの石でございます」和氏は王をたぶらかそうとした不屈者として、左脚を斬る刑に処された。まもなく厲王が亡くなり、武王が即位した。和氏はまたその原石を武王に献上した。武王がこれを玉の細工師に調べさせたところやはり、「ただの石でございます」と言った。和氏は王をたぶらかそうとした不屈者として、今度は右脚を斬る刑に処された。武王が亡くなり、文王が即位した。和氏はその原石をかき抱き楚山のふもとで声をあげて泣いた。三日三晩泣いて、涙は涸れはて血の涙を流した。王がこれを聞いて、人をやって尋ねさせた。「世の中には脚切りの刑を受けたものは多い、お前はなぜ嘆き悲しむのか」和氏は答えて言った。「私は脚切りの刑を受けたのが悲しいではありません。宝玉を石と言われ、正直者であるのに嘘つきであると言われたのが悲しいのです」文王は玉の細工師にその原石を磨かせ、宝を手に入れることができた。そして、その宝を「和氏の璧」と名づけた。

世に完璧という言葉があるが、本当に完璧はあるのだろうか。私は、仕事には完璧という言葉はないと思う。どんな仕事でも、どこかに無駄があり改善することがあるはずである。プロや職人の世界ではこれでいいという言葉がない。常に「まだまだ」と自分を精進して行く。これがなければ進歩発展はない。

自分を見つめ直し、これでいいのか、これでいいのかと自分に問いかけて行きたい。

## 覆水盆に返らず

(意味) 一度したことは、元には戻すことができない。

出典：拾遺記<sup>しゅういぎ</sup>

周の国に『呂尚(りょしょう)』と『馬氏(ばし)』という夫婦がいました。呂尚は、学問を修めることに力を注ぐ余り、働くわけでもなく、夫婦の生活は苦しかったのです。それでも呂尚は、気にも止めずに勉学に励んでいたため、ついに妻は夫に呆れて、「とてもあなたにはついていけません。」

と言って、出て行ってしまいました。

呂尚は、なおも努力を重ね、深い学識を備えましたが、依然として貧しいままでした。しかし、ある日、渭水<sup>いすい</sup>のほとりで、1人釣り糸を垂らしていると、通りかかった身分のあると思われる者が、声をかけてきました。話をしてみると、その人物は、賢人として誉れの高い周の西伯昌<sup>せいほくしょう</sup>で、西伯は、「あなたこそ、我が太公(祖父)の望んだ人物だ。」と言って、彼を太公望と呼び、師として敬いました。

西伯との出会いによって、呂尚は、天下にその名を知らしめることとなりました。その彼の元に、ある日、出ていった妻がひょっと現れ、

「昔は、食事にも事欠くほどの貧しさでしたのでお暇をいただいておりますが、このように立派になられたので、やっぱりあなたの妻としてお側に仕えさせていただきます。」と言いました。

呂尚は、無言のまま盆に水を汲み、それを庭先の土へこぼすと、別れた妻にその水をすくうように言いました。彼女は水をすくおうとしましたが、水は土にしみ込んで救うことができません。そこで呂尚は、言いました。

「覆水盆に返らず(一度こぼれた水は元に返すことはできない)。一度別れたものは、再び一緒にはなれないものだ。」と復縁を断った。

この話から一度起きてしまった事はけっして元に戻す事は出来ないと言う意味で覆水盆に返らずと、言うようになった。

## 太公望

周の西伯は、ある日、獵に出かけようとして(獲物を)占いました。すると、「竜でもなく、熊でもなく、虎でも豹でもない。今日の収穫は、霸王<sup>はおう</sup>を補佐する人物だろう」と結果がでました。獵に出た西伯が、渭水<sup>いすい</sup>のほとりまで来ると、1人の老人が悠然と釣り糸を垂らしています。「今朝の卦(占いの結果)は、この人かも知れない。」と思い、老人に声をかけてみると、人物・識見ともに霸王の補佐たるに十分であることが分かりました。「私の太公(=祖父のこと)が、『周に聖人が来て、その者のおかげで周が栄えるだろう』と望んだ人物とは、まさにあなたのことだったのだ。」西伯は、大喜びで語り、太公が望んだ人物ということで、その人物を太公望と名付けました。そして、この故事が由来で、釣りをする人を太公望と呼ぶようになったのです。

## 尾生の信（びせいのしん）

魯の国に尾生（名は高）という根っからの正直者がいった。人と約束を交わしたら、どんなことがあっても、その約束にそむくようなことはしないという人柄。

さてその男があるとき恋人と待ち合わせの約束をした。

「あしたの晩、河の橋の下で会いましょうね。」

という約束に、一分も遅れることなく、彼はさだめの場所に出かけて行った。女の方が冗談半分にその約束をしたのか、あるいは急に何かの差支えができてのことかは知らないが、とにかく女はその時間その場所にやって来なかった。しかし尾生は前にも言ったような人柄だから、多少はヤキモキもしたろうが、辛抱よく待っていた。

いつまでたっても女はやってこない。その中に上げ汐で河の水がだんだんふえてきて、彼のからだを浸しはじめた。足から膝、膝から胸と水かさはふえるばかりだが、彼はまだあきらめない。しまいには水が頭を越すほどになったので、夢中で橋脚にだきついたが、その甲斐もなく、とうとう溺れ死んでしまった。

とってこの話、青年男女諸君に待ち合わせのエチケットを教えるのが目的ではない。死すとも約束を違えぬとは信義にあつい男だと感服するか、馬鹿正直もここまでくると行きすぎだと批評するか、それも御随意だ。

戦国時代の遊説家として有名な蘇秦<sup>そそう</sup>は、燕王<sup>えんおう</sup>に見えて自説をまくしたてたときに、この男の話を持ち出して、信義にあつい男の例としている。（「史記」蘇秦伝）。前者の見解だ。ところが同じ戦国時代の哲学者の莊子となるとその反対だ。彼一流の寓言で、謹嚴<sup>きんげん</sup>そのものの孔子と、名うての大泥棒<sup>とうしやく</sup>の盜跖に対話させ、その中で盜跖の口からこの男の話を語らせたあげく、

「こんな手合いは磔<sup>はりつけ</sup>になった犬、水に流された豚、もしくは欠け茶碗片手に乞食する者同様、つまらぬ名目にかかずらわって、大事な命を粗末にする男、ほんとうの生きる道をわきまえぬ輩だ。」

と批評している（「莊子」盜跖篇）。莊子のその対話の全文は紹介する余裕がないし、従って莊子の議論の真意がどこにあるかはまた別の問題だが、尾生の行動に関する限り、私もどうやらこの見解の方に軍配をあげたいと思う。ただし放言、食言は物ともせず、目さきの利益追求に余念のないどこかの国の政治家諸公には、尾生の爪の垢でも煎じて飲ませれば、無上の特効薬たることはこれまた疑いないところであろう。

## 心焉に在らざれば

出典：「礼記－大学」

「心焉に在らざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず、食らえども其の味を知らず」は、古代中国の四書五経の一書「大学」中の一文です。ここで、大学は学問の目標と人間の本性を論じる学、小学＝文字・訓話の学は読み書き、古典を当代のことばに言い直して解釈する学です。

視は目の前の対象物をみることで、視力、視界、視覚等に用いられます。見(＝目＋人)は、見地、見解、見識、先見等に用いられ、「眼光、紙背に徹す」、「行間を読む」など、想像、洞察、推理等の心の働きで視覚情報を総合的に処理する過程を含みます。

聴は音の方向に耳を向けてきくことで、聴覚、聴衆、視聴率等に用いられます。聞(＝門＋耳)は、閉じた門を隔てて判じ難いことをきくこと。見聞録は現地を訪れた著者の洞察・解釈、つまり心の働きを含みます)。

私たちは健全な目を持っていると何でも見えると思っていますが、実はけっしてそうではありません。心焉に在りて見る、つまり見ることに意識を集中しなければ見えないものです。例えば、家に時計があるとします。柱時計でも置き時計でもいいですが、出勤のときに見る、家に帰れば見る、一日に最低2回あるいは数回時計を見るわけですが、ではその時計の数字がどういう書体で書いてあるか、正確に思い出せるでしょうか。しかし、画家やデザイナーだったら、正確に書かるかもしれません。それは、我々は時計を一日に幾度となく見ますが、その数字を正確に意識して見ているわけではありません。長針と短針がどういう角度であるか、出勤前だったら8時20分だからそろそろ出かけなくてはいけないとか、そう思って見ておきまして、数字をそんなに注意して見ることはありません。心焉に在りて見るわけでありませんから、記憶に残らないということです。ようはうわの空、心が他のところに向かっていけば、真実は見えないということでしょうか。

心不在焉、視而不見、聴而不聞、食而不知其味。心有不存、則無以檢其身。是以君子必察乎此、而敬以直之、然後此心常存而身無不脩也。

### 【読み】

心焉に在らざれば、視て見えず、聴きて聞かず、食みて其の味を知らず。心存せざること有れば、則ち以て其の身を檢すること無し。是を以て君子は必ず此に察して、敬以て之を直くして、然して後此の心常に存して身脩まらざること無し。

国破れて山河在り 春望（しゅんぼう） 杜甫

国破れて山河あり 城春にして草木深し 時に感じては花にも涙をそそぎ 別れを恨んでは鳥にも心を驚かす 烽火三月に連なり 家書万金に抵（あた）る 白頭搔（か）けば更に短く。

意味

国は滅亡してしまっただけで、山や川は元の姿のまま存在している。（戦争で壊れてしまった）町には春が来て、草木が青々と茂っている。戦争の絶えない時代を感じては、花にさえも涙を流し（家族との）別れを悲しんでは、鳥にさえも心を乱される。戦争は3ヶ月の間絶え間なく続き家族からの手紙はお金に代えられない大きな価値を持つ。白髪だらけの頭を搔けば髪の毛はさらに短くなりもうかんざしを挿すのも無理になりそうだ。

解説

○国破山河在

国は滅亡したけれど、山や川は元の姿をとどめている。人間の創るものはいつか壊れるけれど、自然のものはそう簡単には壊れない。

○城春草木深

「城」は日本のいわゆる「城」ではなく、「城壁で囲まれた場所」、つまり「町」という解釈です。昔の中国では町ごと壁で囲んで外敵から身を守っていたためです。

○時感花濺淚

「時」は「このご時世」ということで、ここでは戦争の絶えない今の時代という意味です。「花濺淚」は、すさんだ世の中にもけなげに咲く花に感動の涙を流したのだと解釈します。

○恨別鳥心驚

「別れ」は、家族との別居を指すようです。「鳥心驚」は訳もなくこみあげてくる怒りの感情で心が乱されていると思います。

○烽火連三月

「のろし」は戦争に使うものなので、「3ヶ月間戦争が続いていた」という意味になります。

○家書抵萬金

「家書」は「家族からの手紙」。家族と別れて暮らす人にとっては手紙が何物にも代えがたいものだったんでしょうね。

○白頭搔更短

白髪だらけの弱った頭髪を搔きむしれば、どんどん毛が抜けて短くなっていくという感じでしょうか。

○渾欲不勝簪

「簪」は、よく「かんざし」と訳されます。短くなってしまった頭髪にかんざしを挿すのが難しくなってきたといった感じの意味です。

<sup>まんどうわきしやうかしやう</sup>  
**満堂和氣生嘉祥**（わき、どうにみちて かしやうをしやうず）

赤レンガで親しまれている東京駅の丸の内側駅舎は、大正初期の開業時は3階建てで屋根もドーム型でした。現在の2階建て・八角屋根に変わったのは、戦災で3階部分が焼失したためです。同駅舎内のギャラリーで開かれている「東京駅所蔵の品々と写真で辿（たど）る東京駅の歴史展」（9日まで）を見て、このようなことを改めて知りました。創建から90年余を経て、当初の姿に忠実に復元しようとする大工事が今月から始まっています。歴史展はこれを記念して企画されたものです。その中に、鉄道院の初代総裁を務めた後藤新平の「満堂和氣生嘉祥」と書かれた作品が展示されています。これは「みんなで和氣あいあいと仲良く力を合わせて仕事に励めば、企業はおのずと繁栄する」ということだそうです。（2006年4月2日1時53分 読売新聞・編集手帳）

組織全体を捉えるという視点に立ったとき、意識したいことは『全体最適』という考えではないでしょうか。組織の人数に関わらず、個人の担当領域のみでのベストを求めすぎると『部分最適』に陥り、組織全体としてセクションの壁などが生じることがよくあります。そうなると、組織全体の視点（全体最適）が希薄になってしまい、最終的な活動性が落ちてしまいます。職員全員が意識として『全体最適』を心がけた動きを積極的にするようにすれば、組織としての集団の凝集性が高まり、よりよい活動が出来ると思います。組織としてヒエラルキーが重要であることは当然ですが、同時に全体の「和」が極めて大切です。「仲良しクラブ」的な「なあなあ」が「和」ではありません。きちんとしたチームワークの下に、主張すべきは主張し、妥協すべきは妥協して、全体の調和を保っていくことだと考えます。「<sup>めいろうしんしゆ</sup>明朗進取」を掲げ、目指す職員像として、明るく朗らかで何事にも目標を定め、自ら進んで取り組む姿勢が必要です。社会で人は互いに生かしあっており、相手に対する感謝と思いやりを基礎に一堂に会して仲よくしていくべきとする「満堂和氣生嘉祥」の考え方は、「ありがとう」という言葉の大切さに始まり、技術を根底で支える心のあり方の核となると考えます。

**満堂**：堂の中の人全部、満場、堂の中に満ちること、堂いっぱい。

**和氣**：むつまじい気分、なごやかな気色

**生**：いのちあるもの、いきていること、うまれること、いのち

**嘉祥**：よろこばしいことの前触れ。めでたいしるし。

**集団凝集性**：メンバーを自発的に集団に留まらせる力の総体のこと。凝集性の高い集団は、メンバー間での相互理解・受容、役割分化、類似した意見・態度、相互魅力などにより特徴づけられる場合が多い。一般に凝集性は、メンバーの動機づけを高め、集団による課題遂行に正の効果をもつ。しかし、集団意思決定場面などで、凝集性の高さがかえって決定の柔軟性や情報探索の範囲を狭めるという指摘もある。

**ヒエラルキー**：上下に、ピラミッド形に序列化された位階制の秩序ないし組織。

## 光陰（こういん）矢の如（ごと）し』 光陰如箭

月日が過ぎるのは、飛ぶ矢のように非常に早い。だから無為に送るな、という戒めの意味を含む。

出典は、いろいろ説がある。

### 1. 李益の漢詩「遊子吟」

語源は「光陰如箭」

（月日が過ぎるのは、飛ぶ矢のように非常に速く、帰らない。だから無為に送るな）

### 2. 「禪門諸祖偈頌（ぜんもんしょそげしょう）」

禪語「光陰如矢時不待人（こういんやのごとし、ときひとをまたず）」

### 3. 朱熹（朱子）の「偶成」

少年易老学難成（しょうねんおいやすく がくなりがたし）

一寸光陰不可輕（いっすんのこういん かるんずべからず）

未覚池糖春草夢（いまださめず ちとうしゅんそうのゆめ）

階前梧葉已秋声（かいぜんのごよう すでにしゅうせい）

『李益（りえき）』 中唐の詩人。 出典：李益「遊子吟」 「光陰如箭」

生れてから今まで、何を生きてきたのか、生き方が問題と考えていたのに何も考えていなかったように感じる。

時は待たない、ただ淡々と過ぎて行く、そしてこの時間は全てのものに平等である。自分だけが長いわけでも短いわけでもない。どういように使おうと自分次第である。ただひたすらに生きるのか、楽しみながら生きるのか、何も考えずに生きるのか、どう生きてても時間は過ぎて行く、終わってしまえばみな同じだ。

生きているときに何かをしたい、何かを残したいと考えていた、それも今は虚しい。人が夢中になれるのはなぜだろう。何かをしたい、やりたいという目標があるからではないか。今の自分の目標は何か、何もない。時が長く感じる、長く感じる。笑っていてもそれは嘘だ。

光陰矢の如しは、夢中になって何かを求めていたからではないだろうか、爛柯かのように碁に夢中になり気がつけば杖が腐るまで時を忘れる。この夢中になるものがない。今の世の中生きて行くだけで大変なのに、何を考えているのか、もっと自分に与えられている仕事に精を出すだけでよいのに、くだらないことを考え、人を疑い自分だけの事を考えている。つまらない。分かっているのに、体が動かない。それでいいのか。一生懸命何かをしたい。

## 好事不出門，惡事行千里(こうじもんをいはず、あくじせんりをゆく)

### 出典

唐末から北宋初の人、孫光憲が唐末から五代にかけての著名人の逸話を集めた「北夢瑣言(ほくぼうさげん)」による。

「好事は門を出でず 悪事は千里を走る」。いいことは滅多に外に出ないので、なかなか世間の評判になることはないけれど、悪いことはすぐに伝わるという意味です。

いいことは、なかなか外に出ないだけに人の評価を受けることが出来ずに一生懸命に努力することが面白くなくなり、多くのひとは辛抱堪らず努力することを止めてしまいます。しかしコツコツ飽きず諦めず努力を続けていると、それがもし本物ならば、やがて必ず日の目を見る時がきて、人の口にのぼり評判となり、努力が報われる時がくるかもしれません。

しかし、悪い行い、悪い噂は直ぐに広まってしまいます。それは、人は今も昔も、三文記事のようなゴシップ的な話を好むからではないでしょうか。人は皆弱い生き物です。どこかに悪い心を持ち、人の失敗や不幸を喜ぶところがあります。また、なぜ、どうしたという好奇心が興味を引くからではないでしょうか。私を含め多くの方は良い心も悪い心もあり、完璧な人がいないから、人の悪を面白、可笑しく、興味を持って人に話し、逆に人の良い話は、ねたみ、やっかみから、つまらないやその人の評価を上げることに繋がるためしないのではないのでしょうか。

人は、与えられた仕事に精を出し、生きる糧である仕事が出来ること感謝し、自分なりに努力を行えば良いのに、他者からの評価を気にします。自分はどう思われているのか、なぜ一生懸命努力しているのに正当な評価をしてくれないのかなど、本来のその努力が何のために行っているのかを忘れ、評価だけに気を取られてしまいます。出世を望むのも望まないのもそれは人の自由です。しかし、大切なことは与えられた仕事を一生懸命やることではないのでしょうか。

他者からの評価を望むなら、評価をする者に、評価してもらうようなことを行えばよいのです。その評価者は誰なのか、上司なのか、家族なのか、一般人なのかよく考えることが必要です。私は、仕事では、仕事の成果を受ける者が本当の評価者ではないかと考えます。

白珪尚可磨（はっけいなおみがくべし） 白珪<sup>はっけい</sup>なお磨くべし

出典：『誌経（しきょう）』 中国最古の詩集

「白珪」は、「白圭」とも書き、白く清らかな玉のことで、祭祀に使われたり、天子より授けられたりするなど、古来、きわめて貴重なものとされています。

形は、上が丸くて、下が四角い、いわゆる上円下方の形をしたみごとな玉のことで、それも完全無欠のものを言います。

出典は、中国の古典「詩経」の中の次のような一節からです。

白珪の玷（か）けたるは、尚お磨くべし。斯（こ）の言の玷けたるは、為（おさ）むべからず。

この意味は、

白珪はもし瑕（きず）があっても、磨けばまた元の美しさに戻すことができる。しかし、人の言葉はもし一度言い放ってしまうと、いかなる手段をもってしても、もう取り返すことはできない。

つまり「言葉というものは、おおいに慎まなければならない。」ということです。もちろん、私たちは、他人の言い過ちを許したり、忘れたりすることができます。

しかし、一旦、口から発せられた言葉というものは、どうやっても取り戻すことはできず、消去、削除することはできないのです。ついつい、心にまかせて、安易に言葉を発してしまいがちな私たちにとって、とても厳しい、戒めの句であると思います。

さて、この句は、本来、以上のような意味なのですが、転じて次のようにも解釈されているようです。

白珪は高貴で清浄で、すでに完全無欠なものである。しかし、まだ磨けば磨く余地があり、さらに磨けばいよいよ清らかなものとなる。禅の道もまた同じで、小成<sup>しょうせい</sup>に安んぜず、さらに磨いて向上せよ。

これは、完全無欠な玉を、尚、且つ磨きなさいというのがもう一つの意味です。もう磨きようがないものをさらに磨く。その努力が大切なのです。これでいいと思ったら、それで終わりです。どうかすると人間は、ついつい安易な妥協をしがちです。色々苦勞をしてきたし、この辺で隠居などでもしよかななどと楽な道を考えます。それも結構でしょうが、やはり人間は死ぬまで修行していかなければならないのではないのでしょうか。物事には終わりはないのです。どんなに完全無欠だと思っても、さらにそれを磨ききっていかなければならないのです。

組織も成長、発展し続けるためには、絶えず時代の流れを読み、会社の進むべき方向、目標を明確に設定し、職員に目標や進むべき道を示し、その実現に向かって自ら磨きをかけ、変身していかなければなりません。

## 徳は才の主にして

明の万曆（1573－1619）年間の人、洪自誠（こうじせい）の作になる、<sup>しよせい</sup>処世の道や退隱閑居の悦楽を説いた「菜根譚（さいこんたん）」の一説。

徳者才之主、才者徳之奴。

（徳は才の主にして、才は徳の奴（ど）なり。）

有才無徳、如家無主而奴用事矣。

（才有り徳無きは、家に主なくして、奴の事を用（もち）うるが如し。）

幾何不魍魎猖狂。

（幾何（いかん）ぞ魍魎（もうりょう）にして猖狂（しょうきょう）せざらん。）

人格は一家の主人であり、才能は召使いである。才能が有っても徳がなければ、主人公の居ない家で召使がのさばっているようなものである。と云い引き続いて、そんなことでは怪物どもがすきに乗り暴れ狂われないわけがない。と申し、人格という主人公が確りしていないと、煩惱（ぼんのう）や妄想（もうそう）が暴れ、遂には本来ある清明な心を失わせ人をだめにする、と説いています。

才能（知識・能力）は仕事を行う上で重要な役割を担っていることは、誰もが感じるところです。また、才能（知識・能力）が低ければ、誰もが見下し、馬鹿にします。これは当たり前のことで、そのために才能（知識・能力）を伸ばそうと努力するので。しかし、幾ら才能（知識・能力）があっても徳（人格・品性）がなければ人はついてきません。

私は、人は才能（知識・能力）よりも徳（人格・品性）を上とする傾向があると思います。その理由として、博識があり仕事も出来るが、人の事を考えない、自分の事だけを考えているとしたら誰がその人に付いて行くのでしょうか。仕事が出来、人の事を考え思いやりのある人なら誰もがその人に付いてくると思います。

また、仕事は人が良いだけでは成り立ちません。与えられた仕事をこなすには、それなりの才能（知識・能力）が必要です。それがなければ仕事は出来ないし、人も馬鹿にして付いてくることはないと思います。良い仕事をしたいならば、この徳（人格・品性）と才能（知識・能力）の両方を磨くことが必要です。

今の私は、徳も才もありませんが、特に徳がなく煩惱や妄想が暴れまわっている状態です。この状態から抜け出すには、日々努力し徳と才を磨くしかないと考えます。

## 疾風勁草

### 意味

苦境や厳しい試練にあるとき、初めて意志や節操が堅固な人であることが分かるたとえ。強い風の中に折れずにいる強い草の意、また、強い風が吹いて、初めて強い草であることが分かる意から。▽「疾風」は激しく速く吹く風。はやて。「勁草」は強い草。節操の堅い人のたとえ。「疾風（しっふう）に勁草（けいそう）を知る」の略。

出典『後漢書』王覇伝：後漢の名君といわれる光武帝のものとして知られています。

後漢の光武帝がはじめて義兵を挙げたとき、帝に従っていた者は、敗色が濃厚になるにつれ一人抜け二人抜けてゆき、最後まで光武帝を助け戦ったのは王覇だけになっていました。光武帝はこれに感動して、「潁川にて我に従いし者皆逝きて、子（王覇）独り留まりて努力す、疾風に勁草を知る」と言ったと出典にはあります。これは、困難や試練に遭遇してはじめて、その人の意志や節操の堅固さがわかるというたとえです。

「宋書」によれば「疾風に頸草を知る」に続いて「嚴霜貞木」とあり、「厳しい霜が下りると、その寒さに耐えられる木だけが枯れずに残るように、忠節を守れる臣下かかどうかは、困難な時が来ないと分からない」と述べています。「隋書」には、煬帝の言葉として、「世乱れて誠臣あり」とし、唐の太宗は「風霜もって草木の性を分け、気乱にして貞良の臣を見る」と具体的にこれを表現しています。

おそらく、中国の古代社会では一国の政治が安定し、各階層の官吏の地位が保障される時期が比較的短かったので、「日和見的」な処身術を身につけるようになったものと想像できます。君主としては、誰が自分に最後までついて来るのか分からず、結局は実際に非常時を経過してみないと人物判定はできません。それを慨嘆した言葉として後世に残されたのでしょう。

現代社会に置きかえてみたとき、身近にも古代中国のような乱世の風潮が随所に見られます。

政界の人びとの変節ぶりは目にあまるものがあり、「一寸先は闇」のたとえどおり、まったく見通しがたちません。政治の世界は予見することが難しく、政策についても今日のYesが明日のNoになるとすると、国民はどの党に票を投じてよいか分からなくなります。そのように判断がむずかしいときに、政治家の「節操」をうらなうには、やはり難局での対応のしかたを「個人の行動のうえで看破する」こととなります。

## 千字文（せんじもん）

中国、梁の武帝（在位 502～549）の命により、1000 の漢字を四字句からなる美しい韻文に編んだものです。六朝時代の周興嗣（470 ころ—521）撰。同じ漢字を二度と用いることがなく、「天地玄黄、宇宙洪荒」（天地は玄黄なり、宇宙は洪荒なり）に始まり、「謂語助者、焉哉乎也」（語助（ごじょ）と謂（い）う者は、焉哉乎也（えんさいこや）なり）に終わります。初学者の漢字学習用に、基本的な漢字を集めて調子のよい文章を綴ったものとしては漢の史游の作という『急就篇』などがすでに見てありましたが、『千字文』は洗練された文体と内容によってそれらを圧倒し、6 世紀から 20 世紀の初めに至るまで、漢字の教科書ならびに習字の手本として、広く用いられました。梁の武帝は書聖王羲之（おうぎし）の筆跡から『千字文』の字を集め、模写させて、皇子たちに与えたといわれ、六朝末の僧智永が王羲之の書を模写したという「真草千字文」（楷書、草書の二体で『千字文』を書いたもの）の真跡かとみられるものが日本に伝わりました。応神天皇 16 年に百済の王仁が『論語』と『千字文』を献上したという『古事記』の記事はそのまは信じられませんが、『千字文』が日本でも早くから重んじられたことを物語っています。

## 欣奏累遣

欣奏累遣は、千字文の中のひとつで、欣（よろこ）び奏（あつ）まり累（わずら）いを遣（や）りと読みます。意味は、「よろこばしいことが次々とあらわれ、心配ごとが消えてゆく。」です。

いやなことも辛いことも後から思えば、みな楽しい思い出かも知れません。いつまでも苦しみを引きずっていたならば、喜びは集まって来ません。自分を変え、考えを変えて前向きに進んで行くならば、きっと悩み苦しみは消えて行くものと思います。

## 感謝歡招

感謝歡招は、千字文の中のひとつで、感（いた）みを謝（しゃ）して歡（よろこ）び招（まね）くと読みます。意味は、「心のいたみは去りゆき、代わって喜びがやってくる。」です。

楽しい、嬉しいと思えばその通りに、辛い、苦しいと思えばその通りに、全てが自分で決めて行くものです。辛い、苦しいと思うより、毎日感謝と安らぎの心で過ごせば、必ず、心のいたみは去り、代わって喜びがやってくると思います。

## 臨池（りんち）

王羲之の「与人書（自論書）」に「張芝臨池学書、池水尽黒」とあり、中国の後漢に草聖といわれた張芝が「池に臨みて書を学ぶ。池水ことごとく黒し」といわれた故事に依るもので、張芝が池に面した書齋で習字に励んだ際、その池で筆や硯を洗った。その水が真っ黒になるまで習書したということで 手習いに励むことをいう。

## 与人書（自論書）

「自ら書を論ず」の意で、王羲之が書に対する自分の考えを述べた体裁を取っているが、恐らく後世に偽作されたものと考えられている。

## 本文

吾が書は之を鍾・張に比すれば当に抗行すべく、或は謂へらく之に過ぎ、張草は猶ほ当に雁行すべし。張の精熟なること人に過ぎ、池水 ことごとく 墨し。若し吾の之に耽ること此の如くんば、未だ必ずしも之に謝らざらん。後達の解する者、其の評の虚ならざるを知る。吾の心を尽して精作すること亦た久し。諸々の旧書を尋ぬれば、惟れ鍾・張は故に絶倫たり。其の余は是れ小佳たり、意に在るに足らず。此の二賢を去れば、僕の書 之に次ぐ。須く書を得て意 転た深く、点画の間 皆な意有り、自から言の尽さざる所有り。其の妙を得る者、事事 皆な然り。平南・李式 君を論じて謝らずと。

## 現代訳

吾の書を鍾繇・張芝と比べた場合、(鍾繇とは)肩を並べるくらいか、あるいは若干追い抜いていると思います。しかし張芝の草書にはまだ追いつけません。張芝が意を注いで草書を習熟したさまは他人の追随を許すものではなく、池のほとりで筆を洗いながら稽古したところ、池の水が真っ黒になったと言うほどでした。ですから吾も彼と同じように耽溺したなら、必ずしも彼に追いつけないとは言えますまい。後世、書を理解するものが(両者の作品を比べたとき)、自分の評価が虚勢ではないことを納得するはずです。吾が全霊を傾けて一作一作丹念に仕上げるようになってから、もう随分たちますから。

いくつもの前代に書かれた作品を目にしたかぎりでは、鍾繇と張芝とが群を抜いています。そのほかの書は一長一短で、特段気にかけるに値しません。この二人の達人を除けば、吾の書がその次にくると言ってよいでしょう。

(ところで)近頃あなたの書を手に入れましたが、含意は非常に深く、一点一画のうちにもことごとく深い意がこめられ、自ずから言葉に言い表せない気風を感じさせます。書の妙諦を得たものは、誰も彼もみなそのようなものです。平南(=王廙)と李式とが君のことを論じて、「人後に落ちるものではない」と評価していましたよ。

張芝：後漢の書家。古来草聖と称された。

鍾繇：後漢末期から三国時代魏の政治家・武将・書家。

## 衣食足りて礼節を知る 出典：管子 牧民

(意味) 生活に余裕ができて初めて礼儀や節度をわきまえられるようになる。

### 原文

凡有地牧民者，務在四時，守在倉廩。國多財，則遠者來，地辟舉，則民留處；倉廩實，則知禮節；衣食足，則知榮辱

### 読み下し

凡そ地を有し民を牧する者は、務め四時に在り、守り倉廩に在り。國に財多ければ、則ち遠き者来たり、地、辟舉すれば、則ち民、留處す。倉廩実ちて則ち礼節を知り、衣食足りて則ち榮辱を知る。

倉廩 … 穀物を貯蔵する倉。

辟舉 … 土地が開墾されること。

礼節 … 礼儀と節度。

### 意味

一国の為政者たるものは、計画をたてて経済を豊かにしなければならぬ。豊かな国へは、どんなに遠くからでも人民は集まってくるし、開発の進んだ国から逃げ出す人民はひとりもない。その日暮らしにもことかく者に礼節を説いたところでなんになろう。生活が豊かになれば、道德意識は自然と高まるものであり、衣食が十分であれば、自分の名誉や恥とかを重くみるようになる。

出典は管子の牧民篇の「倉廩実ちて則ち礼節を知り、衣食足りて則ち榮辱を知る。」からである。

管子は、管仲に仮託して書かれた法家の書物で、管仲の著書だと伝えられているが、実際は異なるとされる。管子は八類に分類され、86篇で構成されている。

管仲の仲は字で、名は管夷吾という。中国の春秋時代における斉の政治家である。桓公に仕え、覇者に押し上げた。一般には字の仲がよく知られている。

管仲は若い頃に鮑叔と親しく交わり、「管鮑の交わり」という言葉が有名である。これは、管仲が、ある時、金を出し合って商売をしたが、失敗して大きな損失を出した。しかし鮑叔は管仲を無能だとは思わなかった。商売には時勢がある事を知っていたからである。また商売で利益が出た時、管仲は利益のほとんどを独占したが、鮑叔は管仲が強欲だとは思わなかった。管仲の家が貧しい事を知っていたからである。管仲が戦争へ兵士として三度参加して三度逃げ帰ったが、鮑叔は管仲が臆病だとは思わなかった。年老いた母が居ることを知っていたからである。このような鮑叔の好意に管仲は感じ入り、「私を生んだのは父母だが、私を知る者は鮑叔である」と言った。二人は深い友情で結ばれ、それは一生変わらなかった。管仲と鮑叔の友情を後世の人が称えて管鮑の交わりと呼んだ。

## 呉越同舟（ごえつどうしゅう）

出典は「孫子」第十一篇「九地」です。孫子は、今からおよそ2千数百年前、激動の中国・春秋戦国時代に生きた兵法家で、戦争で勝利するために、いかに環境に適応するか、そのためのヒト、モノ、カネの動かし方を詳細に分析しました。

現代に至るまで、未だ、彼のものを凌ぐ戦略書は記されていません。その究極の思想が「無形に至る」です。戦略論としての評価は非常に高く、中国人はこれを「孫子以前に兵書無く、孫子以降に兵書無し」とまで評しています。クラウゼヴィッツの『戦争論』と並び、東西の二大戦争書とも呼ばれています。

古来「孫子」に親しんだ名将には「三国志」の英雄として知られる曹操そうそうがいます。また、武田信玄が「孫子」軍争篇から「風林火山」の四文字を借りて旗印としたことは有名です。ヨーロッパではナポレオンやドイツ皇帝ヴィルヘルム二世等が孫子の兵法を実戦したといわれています。

### 第十一篇「九地」

「夫（そ）れ呉人（ごじん）と越人（えつじん）とは相（あい）悪（にく）むも、其の舟を同じくして濟（わた）り、風に遇（あ）うに当たりては、其の相救（あいすく）うや左右の手の如（ごと）し」

呉と越のように仇敵の間柄であっても、一つの舟に乗り合わせて暴風にあって転覆しそうな危機に直面すれば、左右の手のように一致協力することになる。

この篇に書かれていることを要約すると次のようになります。「日頃、憎しみあっている呉と越の人が同じ船に乗り合わせていたとする。もし大風が起れば、日頃の憎悪も忘れ、手を取り合って船を助けようとするだろう。軍を操るのに巧みな人は、これと同じようにその状況により、どの様に状況が変化するかを推測できなければならないのである。」

これが呉越同舟の意味で、単に仲の悪い人たちがどこかで同席するだけでは、意味としては不十分です。彼らが助け合って、初めて本来の呉越同舟になるわけです。

今の時代は何を求められているのだろうか、東日本大震災で日本の産業、経済が大変な危機に陥っているのに、政治は国民を忘れ互いの党利党略に走っている。もっと悪いのは一度手に入れた権力にしがみ付いている総理大臣である。本当に自分が住み生活する日本という国を愛するなら、己の私利私欲を忘れ故国復興のため各党が手を取り合い国のため挙国一致し何をしなければならぬか考えなければならぬのに何をしているのだろうか。

身近な所でも、組織や集団内で対立し合うことがある。しかし、組織や集団の目的や目標がはっきりと示されていれば、対立し合ってもその目的や目標に向かって進むはずである。これが挙国一致であるが、人は小さな個人的な感情でしか動けなのも悲しい現実であることも間違いがない。では私は、個人は何をしなければならぬのだろうか。まず今、この時点で何をすべきかをよく考え、相手や他を否定するのではなく、互いに何が出来るのかを考え、話し合い、対立ではなく共生という考えのもとに前に進むということではないだろうか。

和を以(も)って貴(たつと)しとなし

## 十七条の憲法の第一条

### 原文

一曰。以和為貴。無忤為宗。人皆有黨。亦少達者。是以或不順君父。乍違于隣里。然上和下睦。諧於論事。則事理自通。何事不成。

### 読み下し

一に曰(い)わく、和(やわらぎ)を以(も)って貴(たつと)しとなし、忤(さから)うこと無きを宗(むね)とせよ。人みな党あり、また達(さと)れるもの少なし。ここをもって、あるいは君父(くんぷ)に順(したが)わず、また隣里(りんり)に違(たが)う。しかれども、上(かみ)和(やわら)ぎ下(しも)睦(むつ)びて、事を論(あげつら)うに諧(かな)うときは、すなわち事理おのずから通ず。何事か成らざらん。

### 現代語訳

一にいう。和をなによりも大切なものとし、いさかいをおこさぬことを根本としなさい。人はグループをつくりたがり、悟りきった人格者は少ない。それだから、君主や父親のいうことにしたがわなかったり、近隣の人たちともうまくいかない。しかし上の者も下の者も協調・親睦(しんぼく)の気持ちをもって論議するなら、おのずからものごとの道理にかなひ、どんなことも成就(じょうじゅ)するものだ。

「以和爲貴」和ぐを以て貴しは、孔子の『論語』第1巻 学而第1「有子曰 禮之用和爲貴」礼をこれ用うるには、和を貴しとなす が引用元である。

### 学而第 1—12

有子曰、禮之用和爲貴、先王之道斯爲美、小大由之、有所不行、知和而和、不以禮節之、亦不可行也、

有子が曰わく、礼の用は和を貴しと為す。先王の道も斯れを美となす。小大これに由るも行なわれざる所あり。和を知りて和すれども礼を以てこれを節せざれば、亦た行なわるべからず。

有子がいわれた、「礼のはたらきとしては調和が貴いのである。むかしの聖王の道もそれでこそ立派であった。[しかし] 小事も大事もそれ[調和]に依りながらうまくいかないこともある。調和を知って調和をしても、礼でそこに折り目をつけるのであれば、やはりうまくいかないものだ」

家庭でも職場でも、お互いに相手を認め合い、話し合っって協調し合っって行けば必ず素晴らしい家庭や職場ができることと思います。

## 赤心

赤心を使った成語に赤心慶福と赤心を推して人の腹中に置くがあります。

赤心慶福の赤心とは、赤子の心、つまり何ものにも覆われていない真実のままの心、嘘偽りのない、ありのままの心という意味です。慶福とは相手の幸福に喜びを感じるという意味です。短的に言いますと「真心を持って人様の幸せを願う」ということになります。

赤心慶福から二文字を取り屋号とした店もあります。伊勢神宮の門前町にある300年以上続く和菓子屋赤福がそれです。創業の頃、京都から来たお茶の宗匠が、赤福の店で休み、召し上がったあんころ餅を大層よろこばれ「赤心慶福」の言葉を頂戴き、それから創業者が二文字を取り「赤福」と名づけたとされています。この赤福では伊勢神宮をお参りされる方々に、この赤心慶福「赤ん坊のようなくそいつわりないまごころを持って自分や他人の幸せを喜ぶ」の、おもてなしをすることを社是としています。

また、赤心を推して人の腹中に置くは、後漢書の光武紀上で、「蕭王推赤心置人腹中、安得不投死乎」→「赤心を推して人の腹中に置く いくんぞ死に投ぜざるを得んや」で、光武帝（蕭王）はまごころを以て人に接し、少しもへだてをおかない あの人のためなら命を投げ出しても構わない。というものです。

人の考えや行動を推し量ろうとするとき、それを測る物差しとなるのは自分の考えや行動ではないでしょうか。客観的な判断をなどと言いますが、そうは言っても判断するのが人間である以上、何処かに好悪の感情が交じったり、利害を考えて真に客観的な判断など出来るものではないのかもしれませんが。ただ自分が曲がった見方で相手側を評価したとすれば、相手側もまた同様に曲がった評価を返してくるのでしょうか。自分が曲がった見方をしておいて、相手にだけ真っ直ぐな評価を期待するのは虫がよすぎるのではないのでしょうか。まず自分が純粋な心を持ち、真心を持って人に接するように心がけることが重要ではないのでしょうか。

「赤心慶福と赤心を推して人の腹中に置く」の考えの両方を足してみると、自分の真心もって人と接し、少しの隔ても置かないことが、我が偽らざる心である。これは自分にとっても相手にとっても大変に喜ばしいことである。になるのと思うのです。また人の腹中に置くは、心の奥底、絶対に忘れてはならないもの、なくしてはならない大切なものであると思うのです。

しかし、赤心は年を重ねるごとに薄れ、最後には何処かに行ってしまう、影すら見えない状態となってしまいます。そのため赤心は常に腹中に置くように努力していなければならないものだと思うのです。

## 季下<sup>りか</sup>に冠<sup>かんむり</sup>を正<sup>ただ</sup>さず

君子は未然（みぜん）に防ぎ、嫌疑（けんぎ）の間（かん）に處（お）らず。瓜田（か  
でん）に履（くつ）を納（い）れず、季下（りか）に冠（かんむり）を正さず。

（現代語訳）

君子たるものは、人から疑いを招くような事を未然に防ぎ、嫌疑をかけられるような振  
る舞いはしないものだ。（取ろうとしていると勘違いされぬように）瓜（うり）畑の中で靴  
を穿（は）くような仕草をしたり、李（すもも）の木の下で冠をかぶりなおしたりはしな  
いものだ。

（解説）

儒学の教えでは、礼儀作法と並んで音楽の重要性が強調されました。音楽の調和の中に、  
バランスのとれた人間性の高みを見たのです。儒家の祖である孔子も音楽の調和を非常に  
高く評価していました。古代の聖天子・舜（しゅん）が作ったと言われるショウ（音へん  
に「召」）という音楽があります。斉（せい）の国でその本格的なオーケストラを聴いた孔  
子は、完成度の高さにショックを受け、三ヶ月もの間、肉の味すら分からなくなってしま  
ったといえます。

また、政治に対する天の評価が、民間のはやり歌の中にあられる、という考えが、古  
代から根強くありました。民歌に込められた天意を探るために、漢の武帝は「楽府（がふ）」  
という役所を創設して、民間の歌を採集させました。（※2）やがて「楽府」で採集された  
詩の模倣作が多く生まれると、そうした詩の形式を「楽府」と呼ぶようになってゆきます。

漢代の初期の楽府詩には、作者を特定できないものもあります。素朴な言葉で綴られて  
はいますが、その中には、役人・庶民を問わず、戒（いまし）めとすべき警句が見られ  
る事もあります。その一つに、『君子行』という歌があります。

君子たるもの、人から疑われるような事は未然に防ぎ、嫌疑を受けるようなところには、  
身を置かないものだ。瓜（うり）の畑では、しゃがみこんで靴を穿くような仕草（しぐさ）  
をすべきではないし、李（すもも）の木の下で、冠をなおしたりはしないものだ。密通を  
疑われないよう、兄嫁とは親密に接するべきではないし、年少者は年長者と対等な口をき  
いてはいけない。功績があってもへりくだれば権力を得る事ができる。自分の才能をひけ  
らかさずに、世間と協調するというのは難しいものだ。

周の武王の弟・周公は、（偉大な政治家であったが）かやぶきの家に住み、食事中でも入  
浴中でも、来客があればすぐに出迎えた。そうした態度であったからこそ、後世、聖賢と  
称されたのだ。

歌というよりは、当時の人々が知っていた故事を連ねた処世訓のようですね。瓜の畑で  
しゃがみ込んで、脱げた靴を穿きなおそうとすれば、瓜を盗もうとしていると思われても  
仕方ありませんし、李（すもも）の木の下で、冠（かんむり）をなおそうとして頭上に  
手をかざせば、実をもぎ取ろうとしていたと疑われてしまう事でしょう。この詩から、常  
に用心深く、慎み深く振る舞い、他人から嫌疑を受けそうな状況に陥らぬよう、事前に回  
避せねばならない、という戒めを「瓜田（かでん）に履（くつ）を納（い）れず、季下（り  
か）に冠（かんむり）を正さず」と言うようになりました。

## 知音

知音（ちいん）とは、「心の底をうちあけて話すことのできる友。心の通じ合った親友」のこと。中国の古典『列子・湯問篇』にある「伯牙（はくが）と鍾子期（しょうしき）」の故事から生まれた語である。

春秋時代、琴の名手であった伯牙（はくが）、高山に登った心境を琴でひくと、親友の鍾子期（しょうしき）は、まるで泰山に登ったような気がするといい、大河の流れを表現するつもりでひくと、ちょうど揚子江か黄河の流れのような広々とした思いがするといっ  
て、必ず伯牙がひく琴の音から伯牙の心境を読み取った。

伯牙が「まるで私の心の中とそっくりだ、もはや私の琴の音は君の耳から逃れるところがない」と言ったほどよく理解していたという故事による。

また、「呂氏春秋（りよししゅんじゅう）」には、その後鍾子期が死んだとき、伯牙はもう琴の音を知る者がいないと嘆いて、二度と琴をひかなかつたとある。

→伯牙、琴を破る